

【京都市PTA連絡協議会会長賞】

日本文化の「箱」を守る

京都府立洛北高校附属中学校 3年 花岡 優佳

新しいものと古いものとで比べた時、古いものの方が好きだという人は一体どれ位いるだろうか。現代の世の中では新しいものが望まれ、古いものはどんどん姿を消していく。そのような中で、いつか寺院や祭りなどの日本文化まで「要らないもの」となって消えてしまわないか、私はとても不安だ。そうならないために、文化は新しいものを取り入れ、新しい時代に適応していくことが必要だと思う。

私は先日、能の体験に行き、「新作能」についての話を聞いた。新作能とは、能という芸能から活力が失われないように明治以降に書かれた能の曲目のことである。新作能では宮沢賢治の小説や外国文学も題材にしており、私たちがもつ古典的な能のイメージとはかなり異なる。現代の人たちにもわかりやすく、楽しんでもらえるようにという言葉聞いて、それまで持っていた昔から受け継がれてきたものはこれからも姿・かたちは不変であるという固定観念を壊され、とても衝撃を受けた。そして、姿・かたちが変わっても人々を楽しませるといった目的は変わらないという能の文化の高機能さに驚いた。

また、新しい時代に適応して現代に受け継がれてきたものは芸能だけでなく文学の面でも言うことができる。平安時代の文化の代表である和歌の当時の役割は自分の心を表現することももちろんだが、最も重要なものは人に気持を伝えること、つまり和歌は今でいう手紙の役割を果たしていた。しかし現代では郵便やメール、電話などのツールが発達し、人に何かを伝える時に和歌は必要なくなってしまった。だがそれでも和歌が今も詠まれているのは、もう1つの役割が現在も機能を有しているからである。ここで重要なのは、誰かが故意的に「和歌は人に気持を伝える手段としては不便になったので、役割の重点を他に移そう。」と思ったのではなく、時代の流れの中で自然とそうなっていったことだ。和歌は世の中の変化に適応する力を持っていたから無くならず受け継がれてきた。私たちはこの適応力を見習うべきだろう。

能にしても和歌にしても新しい概念を受け入れることで時代に適応してきた。このように、伝統や文化には今後柔軟性が求められる。

しかしこれに対して、それでは本来の文化の姿が失われてしまうのではないかという反論が予想される。確かにこの方法では文化は部分的にしか残らない。だが私は大事な一部分を残していくことにこそ意味があると思う。文化という箱を受け継ぎ、その中身はその時その時で柔軟に変化させる。不変なのは一部であっても、中身が空になることはならない。この箱と中身は能でいうところの、きまりごとや所作と新しくつくられる演目。和歌でいうところの31音の形式と時代に沿って変わっていく役割だ。見てわかるように、本質的な部分は変わらない。

生活の様式も何もかも違う世界の中で、同じものを同じように存続させるなんて不可能に近い。全く変わらないままで残すことにとらわれてしまったものは、新しい時代に合わず、いつか滅びてしまう。

文化を受け継ぐには、残すべき部分と変えていくべき部分を見極めなければならない。

先人の思想に「温故知新」という言葉がある。この意味は、「古きをたずねて、また新しきを知る」ではなくて「古きをたずねて、そして新しきを知る」だと思う。古と新を分離しないで融合して考える視点をもつことが今後は必要である。これからの世の中は今まで以上の速さで進化していく。

「滝の音は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞こえけれ」平安時代の歌人である藤原公任は、滅びてしまったものに思いを馳せてこの和歌を詠んだ。絶えたものは二度と戻ってはこない一という無常観を枯れた滝にのせて訴えかけてくるこのうたをきくたび、私は、この和歌が先人達からの警告であるように思えてならない。私たちは絶対に文化を途絶えさせてはいけない。何十年何百年後の子孫へ受け継がなければならない。そう思うのは、何より私が日本文化のことが大好きだからだ。